

命に関わる問題になり得る 被災地のアレルギーを抱える人を 支えるNPOの取り組み

アトピッツ地球の子ネットワーク

パルシステム連合会では、地域の活動・事業に関わるNPO法人やボランティアなどと連携する「セカンドリーグ」を組織している。東日本大震災では、このネットワークを利用して、さまざまな支援活動が展開された(本誌8月号「東日本大震災・復興レポート」P.25〜27参照)。「セカンドリーグ」に参加するNPO法人アトピッツ地球の子ネットワークの取り組みを取材した。

アレルギーを持つ被災者へ 安全・安心な食料を送る

NPO法人アトピッツ地球の子ネットワーク(以下、「アトピッツ」)は、アトピー・アレルギー性疾患がある患者とその家族を対象に、暮らし方のアドバイスやサポートをする組織。1993年の設立以来、多くの市民団体や専門家、企業などとネットワークをつくり、多くの人を支えてきた。事務局長の赤城智美さんは、被災地では多くのアレルギー性疾患のある人が苦しんでいると語る。

「アレルギーやアトピーを抱える人は、使い慣れないスキンケア用品で湿疹ができてしまったり、アレルギーの原因食物に反応して呼吸困難になって



NPO法人アトピッツ地球の子ネットワーク事務局長・専務理事 赤城智美さん

しまったり、さまざまな症状を起こします。厚生労働省のモニタリング調査では、食物アレルギーがある人の10人に1人は、アナフィラキシーショックを起こしています。アナフィラキシーショックは、45分以内に治療をしなれば命を落とす重篤な症状になる危険性があるとされています。東日本大震災では、津波で普段使っている薬やネブライザー(ぜんそく治療機器)が流されてしまったり、避難所生活での環境の変化などによって症

状が悪化したりということが多くありました。また、食物アレルギーがある人が、避難所で提供される食事が原因で入院を何度も繰り返すという事態も起こりました。

これまで、スキンケア用品やアレルギーに配慮したシャンプー、アレルギーを除去して調理した食物、医療用品、医療機器などを被災地に送ってきました」

アレルギーを抱える被災者や 家族によるキャンプを計画

震災後しばらくは、インターネットなど通信手段がなくネットワークがうまく機能していなかった被災地で、被災者はどうやって「アトピッツ」の存在を知り、連絡をしてきたのだろうか。

「さまざまな団体や個人が被災地でポスターを張ってくださいました。支援物資の中にもポスターを入れてもらいました。ポスターが張り出されたり、配られたり、クチコミで広がったりして、それを見た方からご連絡をいただきました」と赤城さんは言う。

「アトピッツ」では、アレルギーなどを抱える人とその家族を対象にしたキャンプを毎年実施しており、今年



支援物資を受け取った被災者。感謝の手紙が多く寄せられているという。

被災地の人にも参加してもらおうことにした。

「このキャンプは、安全な食事を楽しめるのはもちろん、同じ症状がある仲間と出会えたり、自然環境の心地よさを体験してもら

えるイベントです。夏休みの期間だけでも、子どもたちが被災地から離れて過ごせるように支援する動きが全国で始まっていて、私たちも同じ思いでいます」

人のネットワークを もっと生かしてほしい

「アレルギーを抱える人にとって、食は命に関わる問題になり得ます。『安全・安心』を追求する食品企業さんや生協さんのような流通に関わる方々の努力で、多くの人がかつても助かっています。生協は多くの組合員を抱える組織ですから、今後は食の提供にとどまらず、人のネットワークをフルに生かした活動を、もっとしてほしいですね」

消化力が未熟な乳幼児のころのトクパク質の摂取の仕方が、食物アレルギー発症の引き金になることがある。

A4サイズの「アトピッツ」のポスターは多くの
人の手を経て、避難所に張られたという。

まずはご相談ください!



東日本大震災被災者支援
**アレルギー用の物資を
無料提供します**

食物アレルギー用の食物、せんそく、アトピー性皮膚炎のケア用品など
必要なものを無料で提供します。

全室から届いた、
赤城さんや赤城さん支援したい
と志願の方やからの寄付や
メーカーさんからの無償提供によって
まかなわれています。

※実施年(2012年)3月まで実施予定

03-5948-7891

●Mail: yoshizawa@atopicco.org
NPO法人アトピッツ地球の子ネットワーク
〒146-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-10-207

—連携機関—
【NPO連携】CANBARO / MIYAGI/宮城復興支援センター
市民キヤベネット災害支援部会、各地のアレルギー一生者団体
被災地NGO協働センター、ボランティア米沢 他

「被災地で私たちのポスターが自然と
広まっていったように、あらためて人
と人の結びつきが見直されています。
被災地では、まだまだボランティアな
ど、マンパワーが必要とされています。
『セカンドリーグ』のような試みで、
生協のネットワークとNPOの力を結
集して、実りある地域復興を実現した
いですね」

赤城さんは生協への期待を込めて
話してくれた。
(文 野口武)

※アナフィラキシーショック…急性の全身性かつ重度なア
レルギー反応の一つ。ほんのわずかなアレルギー(アレ
ルギーの原因物質)が、生死に関わる反応を引き起す
すことがある。

全国ネットワークのもと ボランティア活動の調整を行なう コーディネーターを生協から派遣

新潟県中越地震の翌1995年、企業やNPO、社会福祉協
議会、共同基金などによって構成される「災害ボランティア活
動支援プロジェクト会議」が設置され、日本生協連も今年、正
式に加盟した。同プロジェクト会議からの要請に応え、生協で
は初めて、ボランティア活動の調整を行なう「ボランティア・コ
ーディネーター」を担う人材が、被災地の災害ボランティアセン
ターに派遣されている。

ちばコープ・管理部の^{かなざわよしりの}金澤義典さんは6月20日～7月2日、
岩手県^{みやこ}宮古市災害ボランティアセンターで活動を行なった。
金澤さんが担った役割は、災害ボランティアセンターにおける運
営事務や必要資材・機材支援の現地窓口としてのコーディネート、
そして、他団体との調整や企画など、多岐にわたった。

金澤さんのちばコープ・管理部における業務には、「防災対策」
も含まれている。そうした自身の仕事も踏まえ、災害ボランテ
ィアセンターでの活動から得られた教訓として、①異業種の人た
ちが集まる支援スタッフの間では、価値観の相違をお互いに認
識しながら、「目的での一致点」を共有する災害ボランティアセン
ターの円滑な運営を行なう。②そのために必要な分業は、災害
ボランティアセンターの課題達成に向けた「チームワーク」の中
での工夫を常に意識し、重要な意思決定はセンター責任者(社
会福祉協議会事務局)に委ねるといった側面支援を心掛ける。そ
して、③刻々と変化する被災地の状況を共有した、臨機応変な
センターの「チームワーク」の大切さ、を挙げた。そして、震災
からの復興という



夜7時ごろの宮古市災害ボラセンターの支援スタッフ
たち。

共通の目標の下に
参集した支援者や
支援組織、社会福
祉協議会などと連
携して行なった取
組みを、生協の地
域防災活動にも生
かしていきたい、
と語っている。

支援制度を利用して ボランティアしてきました!

日本生協連が導入した「東日本大震
災ボランティア支援制度」は、被災地
でボランティアを行ないたい職員に、特
別休暇(有給扱い)の利用など、支援
を行なうというもの。品質保証本部
品質保証部の^{たむらたかひろ}田村孝裕はこの制度を利用
し、^{いしのまさ}石巻市ボランティアセンターでの活
動に参加した。



「ボランティアは初めてで
す」と言えば、何回も来てい
る人がなんでも教えてくれま
した」と語る、日本生協連の
田村孝裕。

* * *
私がボランティアに参加したのは、6
月18～20日です。当時の活動内容は、
浸水した家具の運び出しや家屋内外の
泥・がれきを除去することででしたが、私
のような非力な人間でもできることは
いろいろありました。

1日目は、1mくらいの高さまで浸水したお宅の床下の泥出しを
しました。床下にヘドロが積もっていますので、除去しないと臭く
なってしまいます。これを取り除き、石灰をまいて終了となります。

しかし、ボランティアが入る前に、家の人は家具を出し、畳を
上げ、大工さんに頼んで床板をはがしておく必要があります。2～
3日目に伺ったお宅は、2階まで床上浸水した地域なので、まず、
流れてきた自動車など大きな物を重機で除去してもらい、家具は
廃棄する前に中身を確認して必要な物を分けておく必要がありま
した。ボランティアに行く前には、何で震災から100日もたった
のに、家具出しや泥・がれきの除去依頼があるのだろうと思って
いましたが、行ってみて、ボランティアに依頼できるレベルまで準
備するのに100日くらいかかることが分かりました。

必要なものはボランティアセンターのHPに掲載されています。
それを見て安全長靴(つま先に鉄板が入っている)、皮手袋、厚
手のゴム手袋、^{ぼうじん}防塵マスクなどを用意しました。鉄板入り長靴な
んてどこで売っているのだろうと思いましたが、ホームセンターで
売っていました。活動内容や必要なものは、時期や場所によって
変わります。行き先が決まったら事前に各HPでご確認ください。
(談)